



松本学医師



宮下義啓医師

医療最前線 2021年の闘い 県立中央病院から

〈205〉

重症化していった夫、軽症ながらも別の病気で手術することになった妻。山梨県立中央病院が受け入れた新型コロナウイルス感染者は、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」に乗船していた70代の米国人夫妻が始まりだった。夫の搬送は2月11日。受け入れは1人、軽症。主治医

となる宮下義啓医師（肺がん 言えない肺炎症状だった）。宮下医師は振り返る。確立された治療薬がない中、夫の同意を得た上で、抗エイズウイルス（HIV）薬に希望を託した。

夜になって到着した夫は1人で歩くことができ会話も可能。ただ、血液中の酸素飽和度を調べたところ、極めて低い値を示し、レントゲンでは肺に白い影が広がっていた。「中等症。すでに軽症とは

器を装着。気管支にたんが

まり空気の入りがなくなつた結果、左肺がつぶれた状態となる「無気肺」を発症したため、気管支鏡でたんを除去した。

一方、クルーズ船に残つていた妻も感染が確認され、夫の入院から4日後に県立中央病院に搬送された。軽い肺炎がみられる程度の軽症だったが、入院中に脳出血が確認さ

宙服」（松本医師）のような防護具を着用するなど細心の注意を払った。

妻は手術時点ですでに2度のPCR検査で陰性となり、当時の退院基準を満たしていた。それでも「再陽性」の可能性を想定し、対策を万全にして手術に当たった。

多くのスタッフがチームとなつて取り組んだ治療が実を結び、夫妻はリハビリ期間を経て4月下旬に退院した。帰国後、宮下医師宛てに届いたメールには「社交ダンスの練習を再開したい」などと元気に暮らす様子がつづられていた。

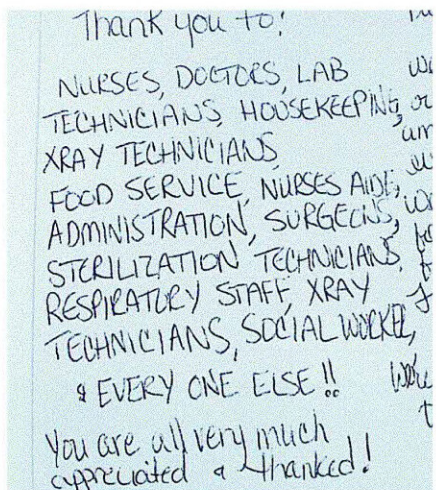
クルーズ船感染者受け入れ 万全の対策で高難度処置

れ、開頭手術をすることになった。脳出血は異国の地で隔離生活を続けるストレスが要因とも考えられた。

人工呼吸器を装着するため夫に行つた気管挿管やたんの除去する気管支鏡、妻の脳出血の手術は救急科部長の松本学医師が担った。気管挿管、気管支鏡は感染リスクが高いとされる処置で、「まるで宇

「夫妻の回復は医療スタッフを勇気づけてくれた」。宮下医師はそう喜びつつ、表情を引き締めて言葉をつないだ。「重症の呼吸管理や感染者の手術といった経験は、その後受け入れている県内感染者の対応に生きている」

第2、4木曜日に掲載します



米国人夫妻の友人から山梨県立中央病院に届いた手紙の一部。看護師、医師、検査技師、清掃員…。全ての病院スタッフに対して感謝の気持ちがこめられている